

令和 7 年 度 自 己 評 価 表

愛媛県立松山東高等学校通信制課程
学校番号 (20)

グラデュエーション・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）	カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）
○「ひとりじゃないんだ がんばろう」を合言葉に、自ら学び自ら考える力を育成します。 ○温かい声掛けを通じて、自分も他人も大切にすることのできる、豊かな心を育成します。 ○基礎学力やコミュニケーション能力など、社会で生きるために必要な力を育成します。	○多様な生徒の適性や興味・関心に合わせた科目選択ができる教育課程を編成します。 ○生徒が自学自習しやすい報告課題(レポート)を作成し、丁寧な添削所見で生徒の学びを深めます。 ○思考力・判断力・表現力の獲得を目指して、学びを充実させる丁寧な面接指導(スクーリング)を行います。 ○生徒相互の絆の深まりと、コミュニケーション能力の向上を目指して、運動会や遠足、生活体験発表大会など、特別活動の時間の充実を図ります。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
シグ ラ ン ド ・ ポ リ シ ー	グラデュエーション・ポリシーの達成	グラデュエーション・ポリシーに沿って生徒が成長していると感じる教職員の割合 7 割以上	A	生徒の成長を感じる教職員の割合が 9 割を超えていた。学習や学校行事への取組状況から成長を感じることができていた。	生徒の多様なニーズに対応する学校として、一人一人の目標に応じた学びをサポートできるように努める。
学 習 指 導 （ 自 主 ・ 自 律 の 精 神 に 富 んだ 人 間 の 育 成）	生徒の学びを深める報告課題の作成と添削指導の実践	1 生徒が自学自習しやすい設問を心掛け、生徒の学習に対する欲求を満足させる報告課題を作成する。	B	教科書と学習書をよく読めば解ける問題と、思考力・表現力を養う問題とのバランスを考えて作成している教員が多かった。	生徒が興味を持ち、思考することができる問題を出題するなど、生徒の学習意欲を高める工夫をする。
		2 報告課題の誤答に対し、正確な解答と具体的な解説を示す。	B	取組が不十分な報告課題には、具体的な手掛かりを書き添えたり、分かりやすいヒントを示したりして、再提出に向けた学習へのきっかけを与えることができた。	正答を導き出すために、手順を踏んだ解説を記入したり、より詳しい解説プリントを作成したりすることにより、自学自習を助けるようにする。
		3 生徒が意欲的に取り組めるよう、添削所見に工夫を凝らし、3 行以上の丁寧なコメントを記入する。	A	自学自習の取組に改善が見られない生徒に対して、意欲を起こさせるコメントを記入するなど、特に手厚い支援を行うことができた。	意欲をなくし、途中で諦める生徒を減らすために、励ましの言葉がけを行うとともに、合格までの道筋が見えるような添削を行うようにする。
	生徒の学びを充実させる面接指導の実践	1 ICT 機器の活用 8 割を目指し、生徒に分かりやすい授業を目指す。	A	授業や学校行事などで、ICT 機器を利用する教員が増えた。日常的に ICT 機器やコンテンツに触れる機会が増えている。	研修だけでなく、教員同士の情報交換を通して、教員の更なる技能向上を目指し、生徒に還元できるようにする。
		2 面接指導におけるルールやマナーを徹底し、生徒が安心して学べる学習環境を維持する。	A	指導の際は、その都度、生徒に声掛けを行うよう努めた。適切にコミュニケーションを図り、生徒が安心して学べる学習環境を維持することができた。	新校へ移転することで学習環境が変化する。配慮が必要な生徒の安全安心な学習環境維持については、特に注意を払う。
		3 授業力向上のため、年間 2 科目以上の相互授業参観（全日制も含む）を行う。 A：4 科目以上、B：3 科目、C：2 科目、D：1 科目、E：参観せず	B	通信制の研究授業にほとんどの教員が参加し、活発な授業研究会が行えた。また、全日制の研究授業等にも参加し、教科指導力向上に努めた教員が増加している。	通信制の研究授業に限らず、校内外で授業改善を図れる機会に参加する。また、教科の枠を超えた授業参観の機会が増えるよう努める。
	生徒の学びを支援する学習進度表の作成や受講計画指導の実践	1 学習進度表を個別に作成し、面接指導への出席時間数や報告課題の提出状況を月に 1 度生徒に知らせる。	A	全ての教員が、学習進度表をきちんと作成することができた。面接指導への出席時間数や報告課題の提出状況の間合せには、必要に応じて助言を添えている。	面接指導への出席時間数や報告課題の提出状況を常に確認し、生徒の状況を把握する。学習状況についての間合せにも適切に対応し、生徒の学びを支援する。
		2 年間の受講計画を個別で作成し、卒業までの学習計画を行う。	A	相互点検を注意深く行い、個々の生徒にとって最適な受講計画を提供できた。新校への移転に伴い、マニュアルの内容を見直した。	引き続き、相互点検を注意深く行う。また、担任の意見を参考にマニュアルの内容を見直し、個々の生徒に最適な受講計画を提供できるように努める。
※ 評価は 5 段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。					

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
生徒指導 (通教生としての絆を深め、 支えあう温かい心の育成)	生徒相互の絆を深めるための特別活動等の活性化	1 生徒会活動は、全生徒をもって組織することを意識付け、役員が計画・運営しやすいような環境づくりを目指す。	A	月例会では、役員同士の意見を行事運営に反映することができた。また、各行事では、役員全員が計画や運営に関わることができた。	生徒会活動が全生徒の協力のもとに成立していることを意識させ、自主的に学校行事を企画・運営し、充実した学校生活づくりを目指す。
		2 特別活動の内容を充実させ運営を工夫し、学校行事の参加者を増やし充実感を高める。	A	特別活動の内容を吟味し、生徒が自ら取り組み、自己達成感を感じられる行事を増やしたため、例年より参加者が増加した。	学校行事やホームルーム活動の内容を生徒の実態に合わせることで、参加者を増やし、充実感が得られる活動になるよう努める。
		3 サークル活動を積極的に奨励し、加入率を高めるとともに、大会等を目指し活動内容の充実を図り、加入率を上げる。	B	加入率は、体育系で昨年10% (57/545名) が今年度11% (54/495名) に、文化系で昨年5% (29/545名) が今年度4% (20/495名) であった。全国大会には、体育系1種目で2名が出場した。	年間6回という少ない活動回数ではあるが、サークル活動について友垣通信や生徒会報「ふれあい」等で周知し、加入率が15%になるよう努める。
	学校との絆を深める友垣通信等の充実	1 職員全員によるチェック体制を強化し、より分かりやすく工夫された内容の友垣通信を発信する。	A	教職員全員で2回以上の確認を行い、正しい情報提供ができた。活動報告の充実を目指し、内容の精選ができた。閉課程にあたり、3月号に歴史を振り返る記事を掲載予定である。	必要事項が、より適切に伝わる内容になることを目指す。学校行事の予定・報告を工夫し、行事への参加を促せる記事になるよう努める。
		2 友垣通信と掲示板・ホームページ(1日300件以上の閲覧を目標)の内容を関連付け、総合的で魅力的な情報提供に努める。	B	学校生活が分かる内容、新校に関する内容を中心に情報を掲載した。関係者が知りたい情報を掲載するよう心掛けた。	魅力的な情報提供に努める。また、新校への移行に伴い、関係者が戸惑うことがないよう、適宜、最新の情報を提供する。
	「来てよかった学校」づくりの実践	1 通教生活を送るうえで、ふさわしい態度やマナーを身に付けられるように、支援や指導に努める。(授業中、学習室の利用など)	B	教員から率先して挨拶することなど具体的な指導を行うことで、基本的な生活習慣が確立されつつある。通教生活に対する生徒の意識の向上が図られた。	生徒に対する指導を全教職員が等しく行うことで、通教生活を送るうえで、ふさわしい態度やマナーを身に付けさせる。
		2 立ち番や校内外の巡視によって生徒の様子を把握し、安心・安全な環境づくりに努める。	B	年々生徒の実態は多様化しているが、面談や声掛けにより、校内外での生徒の様子を把握し、安心して学校生活を送る環境をつくることができた。	生徒への温かい声掛けを継続することで生徒の様子を把握し、新校でも安心して学校生活が送れるように支援する。
		3 進路に関するホームルーム活動の出席率を全校生徒の50%以上にする。 A:50%以上、B:40%～、C:30%～、D:20%～、E:20%未満	A	進路に関するホームルーム活動は、前期に2回、後期に1回行っている。3回の参加人数の合計は、全校生徒478名中262名(55%)であった。昨年(50%)と比べて上昇した。	学習段階(年次)に合わせた講座を開設している。進学希望の生徒が増加傾向にあるため、ニーズに合わせて、一層、内容の充実を図る。また、次年度も外部講師による講座を積極的に取り入れる。
		4 自己管理により、心身ともに健康な体をつくるとともに、健康への意識高揚を図るために、入学生の健康診断受診率を90%以上を目指す。 A:90%以上、B:80%～、C:70%～、D:60%～、E:50%未満	A	入学生の健康診断受診率は、91%(156/171名)であった。依然として生徒の意識の高さを感じた。二次検査を必要とする生徒は、適宜、再検査の呼びかけをしたことで、ほぼ全員が受診した。	入学時に健康診断の必要性を説明し、健康への意識高揚を図る。全員が受診するように呼びかける。
		5 温かい声掛けやスクールカウンセラーの活用を通じて、教育相談の充実等を図り、相談しやすい環境づくりに努める。	B	SC相談については、若干増えている。相談しやすい環境が整っていることを周知し、教育相談の充実を図った。	相談できる環境の需要は高まっている。新校では、掲示や配布物等で生徒がより気軽に相談しやすい環境づくりに努める。
業務改善	適切な勤務時間を遵守するための業務分担の実践	1 ICT活用能力の向上を図り、業務の効率化に取り組む。	B	システム化に慣れてきて、効率化が図られている。一方で、システム化しにくい通信制の業務への対応に課題が残った。	通信制の仕組みに対応できるシステムの構築に向けて、継続的な検討に努めたい。改善への見直しには積極的に協力する。
		2 ワークアズライフの考え方で、働きがいのある職場づくりに努める。	B	時差出勤やテレワーク等も活用しながら、働きやすい、休暇の取りやすい環境づくりに取り組むことができた。	引き続き、教職員にとって、明るく楽しい職場、活気ある職場の雰囲気づくりに努める。
※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。					